

「Delectatio」とその恩寵

—その人間論的意味—

林 伸一郎

我々の課題は、一七世紀フランスの思想家、ブレーズ・パスカル（一六二三—一六六二）の宗教的人間論に、その神学的背景という角度から光をあてることにある。本稿においてはパスカルが恩寵を「よろこび（*delectation*）」として捉えていることから、当時において、恩寵をそのように捉えることが含意している人間理解を、恩寵論の論争相手の人間理解と比較することによって浮き彫りにしたい。パスカルの恩寵理解の背景には、当時、「よろこび」という概念を鍵概念としてアウグスティヌスの恩寵論を再構成した神学者コルネリウス・ジャンセニウス（一五八五—一六三八）の恩寵理解があると考えられている。パスカルは当時、神学上の論敵からジャンセニストと呼ばれていた、このアウグスティヌス主義神学者の支持者の中でも、恩寵を「よろこび」とする理解を受け継いで恩寵論を著した小数派に属している。

ところでジャンセニウスがもつばらアウグスティヌスにのみ基づいて恩寵論の再構成を企てた事実を理解するために前提とななければならない思想的脈絡として、一六世紀以来カトリック神学界内で交わされた恩寵の有効性と人間の自由（自由意志）を巡る恩寵論争がある。人間の意志を神の道具と見なすプロテスタントの出現を受けて、カトリック神学界は、「成義（＝回心）」を論じるトリエント公会議第六討議（一五四七）において、意志に

先行的に働きかける恩寵に対して人間の自由意志はそれに同意を与えることも拒むこともできるのであって、恩寵に対して完全に受動的にとどまるものではない、と主張し、善き行為への先行的恩寵の必要性和人間の自由意志の双方を認めて、人間の自由、言い換えるなら恩寵の下での人間の主体性を巡る論争の前提を設定したのである。

そのような前提の下で、カトリック神学界ではスコラ神学的概念枠組みを前提とする、恩寵の心理学とでも言うべき恩寵の働きの概念的分析が行われた。その結果、その概念枠組みを用いて、対立する神学的人間論が提示されることになった。一七世紀におけるイエズス会とジャンセニウスの対立もそれぞれの恩寵—人間理解がスコラ神学的概念の理解を通して現れている。

さてイエズス会、ジャンセニウスのいずれも、意志への先行的恩寵をよろこび＝魂の非熟慮的働き（*actus indeliberatus animi*）と定義している。恩寵は人間の魂における働きとして理解されるのである。我々はイエズス会神学者（モリナ（一五三三—一六〇〇）、スアレ（一五四八—一六一七）とジャンセニウスのそれぞれの恩寵理解をよろこび（*delectatio*）、非熟慮的（*indeliberatus*）という概念を中心に分析し、確認する。そしてイエズス会の神学がジャンセニウスを批判する際に立脚している人間理解とジャンセニウスのそれとの相違を浮き彫りにして、パスカルの恩寵—人間理解をその神学的背景から照射しよう。

スコラ神学において、人間である限りの人間の行為は、理性が与る意志の働きとしての自由意志が自己原因となる選択行為であるとされている。そして選択を行う際の第一契機が選択肢の意識化としての「熟慮」である。したがってスコラ的行為分析におい

て「熟慮」は行為主体が自己原因であること、つまり行為を自由にすることを可能にする自由の原因である。それゆえ選択されない「非熟慮的作用」は自由でない働きとなる。

トマスに代表されるスコラ神学においては、行為の自己原因となる自由な人間さへも、第一原因たる神に依存している第二原因とされる。彼らにとって自由の基体は意志であり、原因は選択の場を意志に開く理性であり、根源は第一動者としての神なのである。

それに対してイエズス会の神学においては、選択における人間の能動性が著しく強調されることになる。自由意志は能動的に選択する能力を持ち、行為を神と協働して生み出すいわば神と同等の自律的原因性となる。それゆえ自由意志は「能動的無差別」を持つと言われる。選択を行う意識の領域において人間は自律的主体となったのである。

他方ジャンセニウスにおいては、恩寵が「非熟慮的」作用と言われる時、選択のスコラの分析を前提とはしていない。彼が前提とする人間は「原罪の結果、欲望に囚われている」人間である。それはイエズス会の神学者たちが前提としているような、善にも悪にも中立的で、いずれをも自力で選択できるような意識の主体ではなく、欲望の主体なのである。このような意志は、アウグスティヌスの回心の記述において善を認識し、意志するの、それを意志できず、かえって悪を行ってしまうという矛盾の様相を示している。ジャンセニウスにとって、意志は自発性として常に自由であるのに、同時にある行為に関しては自発しえない無力を持つことになる。この矛盾をジャンセニウスは意志の内的動因が意識の届かぬ外的な原理によって与えられるという事態として捉え

た。そして意志に内的なその動因こそ「よろこび」であり、それを与える外的原理が罪もしくは神と規定されたのである。ジャンセニウスにとって「よろこび」はそれが意識の外部から意志の根底に働きかける原理によるものであるが故に「非熟慮的」と言われる。そしてそれは意志の内的動因であるが故に、意志は自発的であり、自由である。しかし同時にその意志は意識の外部にある原理によって発動を決定されているのである。

宗教的原理への依存から解放された自律した人間的行為の領域の登場、人間の自律的自由の確保という事態を近代の特徴とするなら、イエズス会神学者たちの熟慮と意志への信頼は宗教における近代的主体の顕れとして捉えることができるであろう。また人間存在の根底に罪と恩寵という宗教的原理の働きを見るジャンセニウスの人間理解はその立場からすれば復古主義とも見られるであろう。しかし選択の意識性ではなく、「よろこび」や欲望を主体性の在処とする彼の理解は近代における宗教的主体を理解する一つの可能性を示すものであったといえる。実際、ジャンセニウスにならい、パスカルも人間を「よろこびの奴隷」として「罪と恩寵」の相の下で捉えていたが、意識的選択にその「背後の思想」つまり無意識的な動機を読みとり、人間存在の基底に罪と恩寵によって規定される宗教的主体をあぶり出し、近代的主体を宗教的主体の表徴として解釈する彼の解釈学の基礎はまさにこの根本認識にあったといえるからである。イエズス会の神学者たちの恩寵—人間理解とジャンセニウスのそれとの対立は宗教における近代(的主体)と近代における宗教(的主体)のせめぎ合いを示しているのである。